

目きこらひて (8)



母が脳内出血で倒れ、言葉を失った。そのリハビリに付きあいながら、言葉はどこから来るのだろうか、という思いにかられた。

「(頭の中に文字が) あるんだけど、それが言えない」という。頭の中の引き出しを手でかき回して探しているような顔をしている。しばらく待つ。もっと待つ。「うん、またにしよう」と母が言う。探し物はなかなか簡単には見つからない。

四人部屋の住人は、顔や口、頭に怪我を負った人々。「つらいね」と言いつつも笑いの絶えない病室で、母も少しずつ笑顔を取り戻していった。

「お名前は? ここはどこですか? お年は?」という質問が、回診の度に繰り返される。絞り出すような答や、とんちんかんな答が飛び出す。

看護婦さんが去った後、前のベッドのおばさんがつぶやく。「普通に、何ということもない話をしてるといいんだよ。そうするとスラスラって話せるんだよね」母も笑いながら「緊張すると言えなくなっちゃう」と相づちを打つ。



車イスを押すのが
大好きな一種
誰のための散歩か
わからぬ気が...する..

絵と文 宮里暁美 (目黒区ふどう幼稚園)



耳をすまして

母の隣のベッドには、頭の手術をしたおばあちゃんがいた。ぼんやりとして、ほとんど話もしなかった。

そのおばあちゃんのところには、幼なじみの男性がお見舞いに来た。とたんに、おばあちゃんは「あらやだ、きまりわるい」と大きな声で言った。そして、ずいぶん長い時間うれしそうに話をしていった。田舎で一人暮らしをしていて倒れたというおばあちゃんだったが、気丈に一人暮らしをしている様子が見えるような気がした。

緊張すると話せなくなる母、知らない人に囲まれていると一言も話せないおばあちゃん、でも、場面が変われば全く違う姿になる。言葉はどこから来るのだろうか？

リハビリにつきあい、食事の手伝いをして、それでも心配で去りたい気持ちの私に、母が、また何か言おうとする。待つ、ゆっくり待つ。「あ、」という顔になる。

「何？」と聞くと、「すみやかに行きなさい」と言った。

母の言葉に、耳をすまます。

母の言葉が、母という体と心を通り抜け、外界に出てくるのを、私はゆっくりと待っている。

